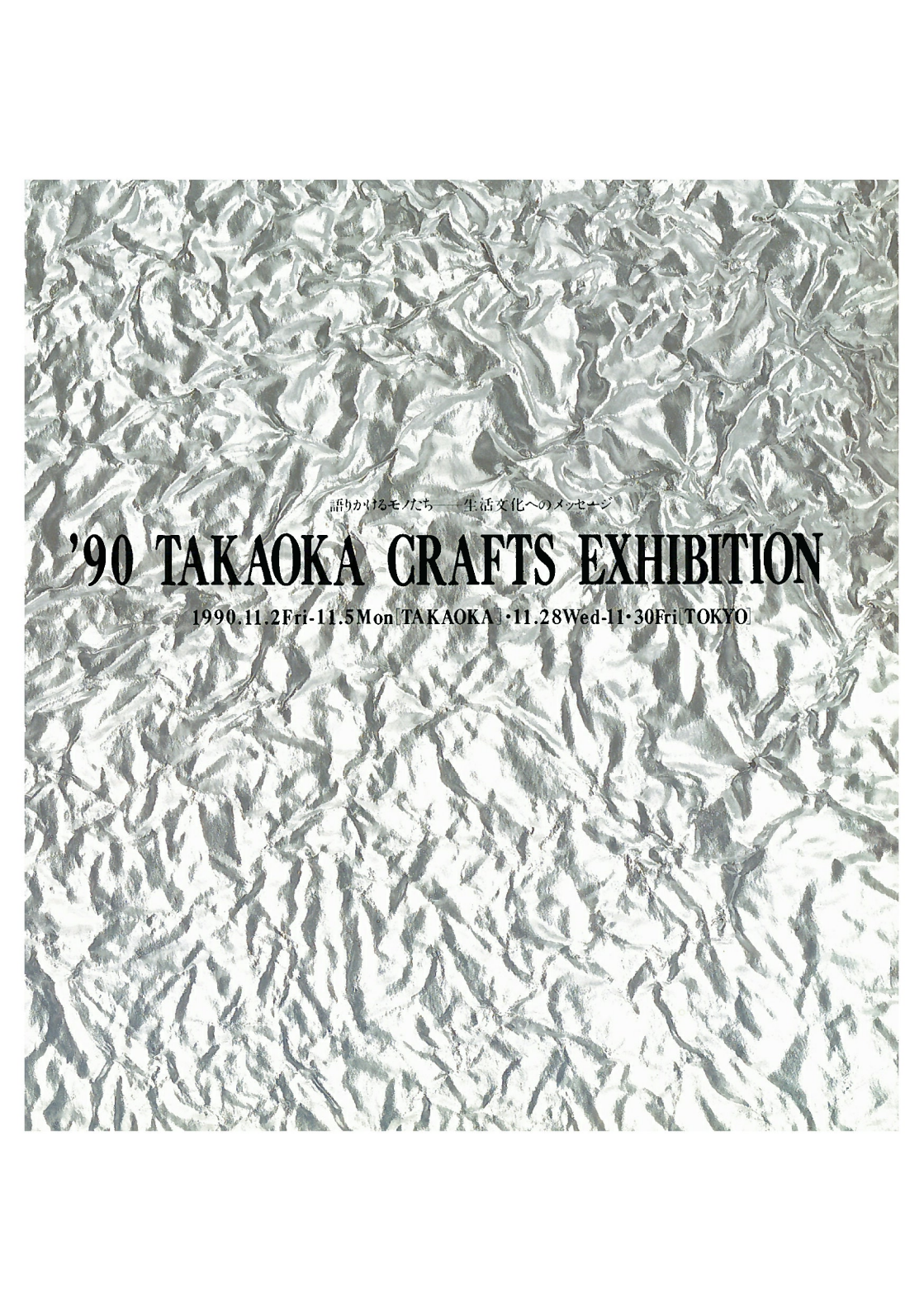




語りかけるモノたち——生活文化へのメッセージ

'90 TAKAOKA CRAFTS EXHIBITION

1990.11.2Fri-11.5Mon TAKAOKA・11.28Wed-11.30Fri TOKYO



ごあいさつ

工芸都市高岡'90クラフトコンペ審査委員長
富山インダストリアルデザインセンター所長

平野 拓夫

高岡クラフトコンペも今年で5回目を迎えた。このような啓蒙運動は、その質の向上と継続することに意義がある。年を重ねるごとに応募数も増え、作品自体も螺旋階段を上るように高まってきている。これは、高岡クラフトコンペの名声が日本全国に広まってきたことにより、審査員の人格的魅力と多岐にわたる見識の広さに基づくものであると思う。

一般にクラフトコンペや工芸展の審査は、その世界から選ばれた審査員が当たるのが普通であり、従来、人の暮らしを「衣・食・住」と機能をもとに表現していたがこの機能が充足された現代は、「心・健・遊」の抽象的な面をいかによく演出するかを大切に考える時代になってきている。従って創造の世界も従来の建築・絵画・彫刻・工芸といった区分だけでは表現できないことが多くなってきている。

高岡クラフトコンペの特徴は、これを受けて建築家、工業デザイナー、グラフィックデザイナー、生活空間デザイナー等、広い分野の権威者を迎えての総合審査によって成り立っているところである。継続性については、富山県、高岡市、高岡商工会議所ならびに財界の方々の強力な理解と支援に基づき、さらに高岡周辺のクラフトマンやデザイナーの絶大な協力によって成功している。これは他の地域では決して真似できないことであり、これからはこの啓蒙運動が国際的なスケールに波及し、発展していくものと思う。

COMMENT

常査員講演



造形家
伊藤 隆道

今の若者は、ほとんどこれ(金賞のキャンドル・ステックのアート志向)なんです。こう言ったものが「フレッシュに感ずるのは、クラフトの基盤が遅れているのではないのでしょうか。

恐らく若いクラフトマンが出品していると思いますが、自分自身の中でまとまりをつけていない混乱があるように見受けられました。

日本人の創造性の幅の広さかもしれないけど、ことに家具が象徴的ですが、技に溺れているみたいな印象がありました。

今、日本の工芸やクラフトの陥ち入っている何かが表出しているような印象を全体に感じました。

入賞作品はそうでもありませんが、今回は作り手が見え過ぎていて、その傾向が将来多くなってくるのは、これからの問題として感じました。



建築家 プロダクトデザイナー
黒川 雅之

工芸都市高岡クラフトコンペティションは、その言葉が表すように、クラフトという長い歴史を背景として培われた文明…手の先から生まれよとする世界と、デザインという現代的な現状との接点にこのコンペがあると僕は考えたい。

デザインは、こういう接点をベースにしている世界ですが、どこまでクラフトデザインスタイルと言ったものがあつたかと言え、未だという気がします。

各々が既成の領域の中に閉じ込め、領域を越えていくものがみえてこない。領域間のインターフェースの事件のような提案や作品が出ていない。もっと深い状況を生みだしたものをという期待が大きい故か、まだまだ答えが出ていない状況にあると思う。

COMMENT

審査員講評



ソニー企業㈱社長
黒木 靖夫

クラフトコンペ高岡と言うのは、普通の伝統工芸ではない「高岡」の独自性を出すべきだと思う。

クラフトって言うのは、当然テクノロジーの世界ですから今までは、そのメカニカルテクノロジーが中心となって、そこに美的な観点を加味されれば、それが非常に高く評価されていた時代でした。

今から大切なことは、そこに限らないソフトウェアと申しますか、もっとインテレクチュアルなテクノロジーを加味することではないだろうか。

高岡のクラフトコンペは、今までと同じ型で審査をしないで、しかも、これだけのバリエーションの広がりを持つ作品が選ばれたと言うことは、非常に良い方向に動いているんじゃないかという気がします。



東京芸術大学教授
平松 保城

30～40年前のクラフトは、一般的には量産の安ものという捉え方をされましたが今は、機能的なものからアート志向なものまで幅が広いと思います。いろんなものか、高岡クラフトでみられたことは意義があったと思います。

高岡に限らず、地域産業からの出品が型に固持すると言うか、精神的・技術的伝統を大事にしたいと思うのは分かりますが、そこから今日の生活と言うか、型を破る行為があって欲しいものです。

私(金属)の立場から考えますと、アート志向の焼き物が賞に入ったのは、金属をやる人にとっては大きな刺激になると思います。

高岡のクラフトコンペは、新しいものを導入しながら、高岡近辺だけではなく広く日本・世界が注目するコンペになって欲しい。その可能性もあるんじゃないかという気がします。

COMMENT

審査員談話



グラフィックデザイナー

松永 真

審査員がバラエティーに富んでいて良いコンビネーションでした。各審査員は各々のシチュエーションで選んでいます。結果的にここに選ばれた作品は、非常に良いバランスとなりました。

それぞれの分野に一長一短がありますが、特にクラフトは、非常に密室的なものを感じます。

高岡クラフトコンペは、作品図録を全てカラーにしないのですか？ 展示会に来る人は限られていますから、どれ位より近似値に伝達していくかが重要ですし、高岡はやはり良い伝達方法を確立すべきです。

展示会の成功には、効果的な演出と伝達・記録が重要です。基本は、コミュニケーションですから、高岡の行動・活動をさらに、一步一步進めていって欲しい。



日本ジュエリーデザイナー協会会長

山田 礼子

いろんな所でコンペティションが盛んですけれども、今回、キャンドル・スティックのようなタイプのものが金賞に挙げたことは、クラフト展の枠を広げる意味で非常に役に立つんじゃないかと思います。

入賞作品のバランスとしても、硬質なものの中に、人間の気持ちのどこかにある明るいとか、呑気な雰囲気を持ったものがあるのは今回のコンペティションの特徴です。それも、いろんな方々が審査員に登場していらして多様性があつたんだと思います。

とかく、審査というと、大きな器とか存在感のあるものに目が行きがちですが、キャンドル・スティックのようなタイプのものを拾いあげたというのは、クラフトへの提案性というものも含めて意義があつたと思います。



CRAFT COMPETITION IN TAKAOKA

入賞作品

PRIZE

グランプリ

グランプリ

青木 聖 「箱」

●材質 錫 ●寸法 17×17×8cm 10×10×4cm
21×14×8cm 13×8×4cm

内包力を形体化したフォルムに、四隅の鋭敏さがアクセントになって、清潔で気品のある箱となっている。

素材の扱いを熟知しており、溶接の跡処理、外からの荒らし金槌による表面の槌目など、良質な仕事によって造形行為を最小限に留めた作者の力量と、造形センスを高く評価する。





金賞

増井 洋子

「キャンドル・スティック」

●材質 陶器

●寸法 23×13×70cm

この作品の持つ良い意味の曖昧さが、現代の整備された住空間の中にエネルギーを加えてくれて、見る者にとって楽しさが伝わってくる作品である。ともすれば、普遍的な型や技に固執しがちなクラフトの世界に、この型を破る行為が領域の広がり可能性を感じさせる。



金賞

小林 伸好

「歪んだ箱 I・II」

●材質 乾漆

●寸法 15.6×19.2×11.5cm
9×14.3×8.4cm

遠い記憶…沈んだ宇宙のメカニズムが投影された不思議なインパクトのある箱である。

基本的な乾漆技術を押さえた上で、漆の箱という伝統的な概念から現代へと移行しようとする意味が感じられる。

角に入って角を超えた作者の力量は確かだ。

銀賞

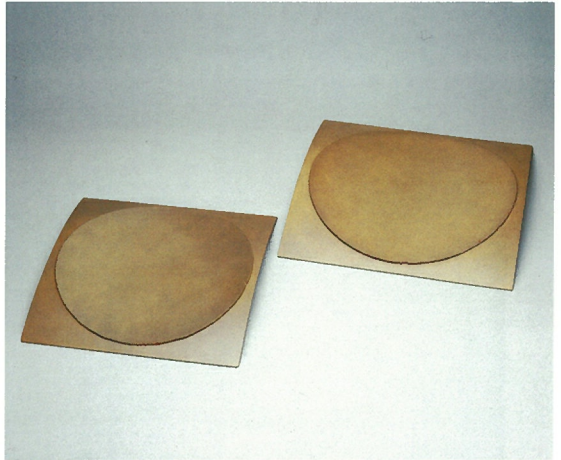
光本 岳士

「鉄盛器」

- 材質 鉄
- 寸法 45×45×5cm
40×40×4cm

土から生まれた鉄を再び土に戻す土器のような感覚があり、鉄という素材の持つ鈍重なイメージを裏切るようなシャープなフォルムや良質な仕上げ技術により鉄にあるまじき印象を与えている。

鉄による器物として提案性をもったインパクトのある盛器である。



銀賞

田尻 誠

「NABE」

- 材質 陶器
- 寸法 43.5×23.5cm
35.5×17.5cm
29.5×22cm

土の色と炎のイメージから土器の原点を撈獲とさせる作品である。従来土鍋から出た領域の広がりを感じさせ、パーティーのメインテーブルに在ると堂々としたその存在感が光るであろう。

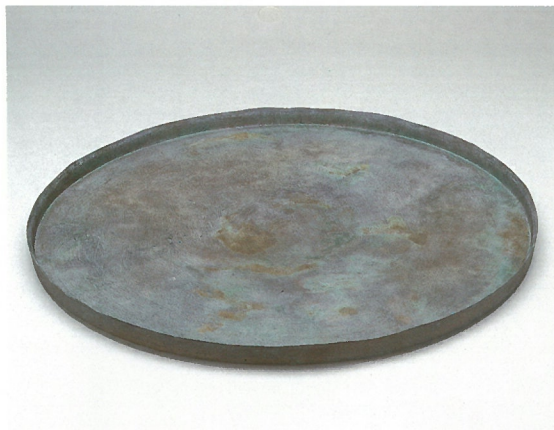


奨励賞

畠山 耕治

「青銅の盤」

- 材質 銅合金
- 寸法 98 $\varnothing$ ×6cm

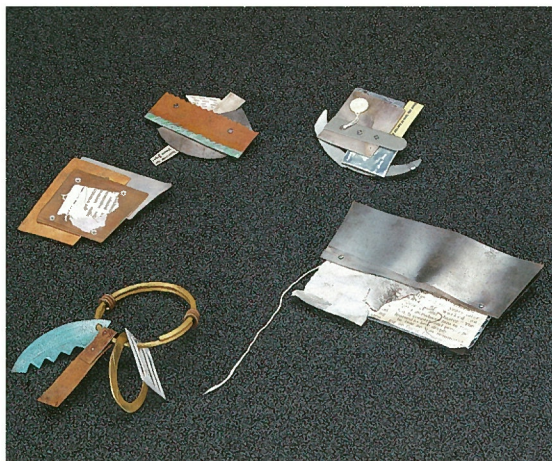


奨励賞

世良 順

「ジュエリー」

- 材質 金属・七宝
- 寸法 (ブローチ) 12.2×8.5×1cm 7.7×6.6×1cm
7.6×7.7×1cm 6.6×7×1cm
(キーホルダー) 11×5.7×3cm



奨励賞

織田幸銅器

「器“三重奏”」

- 材質 漆
- 寸法 70 ϕ ×38cm
48 ϕ ×35cm
36 ϕ ×28cm



奨励賞

増田 尚紀

「PLATE, DAEN」

- 材質 アルミニウム
- 寸法 43×40.5×5.5cm
32.5×31×4.5cm
24.5×23×3.5cm



奨励賞

佐藤 建夫

「二段入子弁当」

- 材質 枋・漆
- 寸法 15.5/2 × 10.5cm

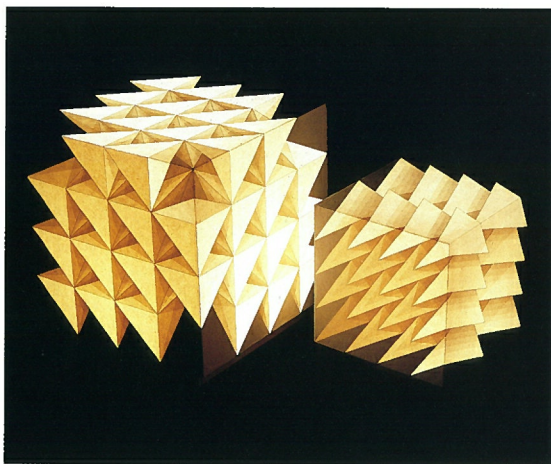


奨励賞

柴崎 幸次

「Night Face」

- 材質 和紙・アクリル
- 寸法 36×36×41cm
25×25×30cm

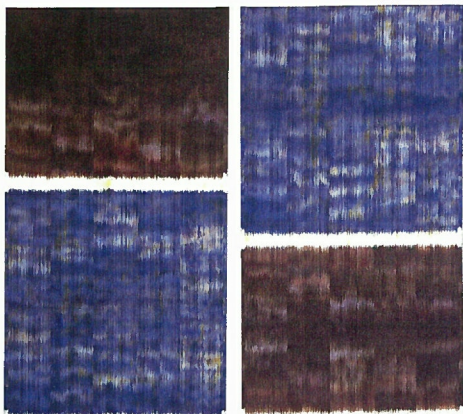


奨励賞

富田 潤

「KASURI」

- 材質 麻・絹
- 寸法 100×203cm



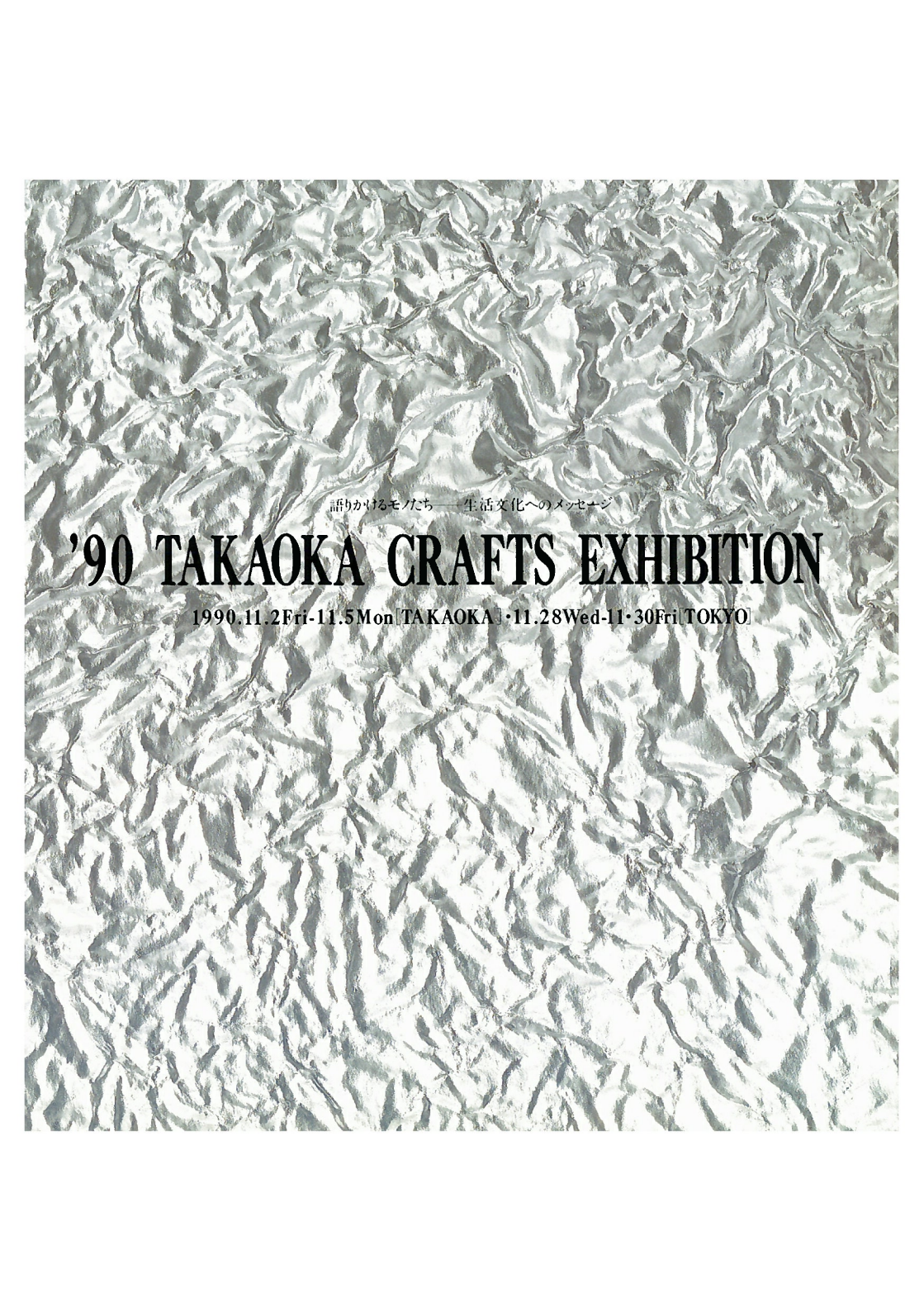
奨励賞

清水 光夫

「組木」

- 材質 桂・栓・赤エゾ松
- 寸法 5.8×40.5×14.8cm





語りかけるモノたち——生活文化へのメッセージ

'90 TAKAOKA CRAFTS EXHIBITION

1990.11.2Fri-11.5Mon TAKAOKA・11.28Wed-11.30Fri TOKYO